

長久手市では、地域の課題を地域の方々と一緒になって解決していく住民プロジェクト「絆」を推進しています。

地域に存在するさまざまな課題のうち、行政だけでは解決できないものについて、市民が主体となり、あるいは市民と行政がともに汗をかきながら、課題を解決するための取組みや、子どもからお年寄りまでだれもが、様々な機会で活発に活動し、あるいは暮らすことができるようになるための取組みについて、次の3つのフラッグ（基本理念）を念頭に置きながらまちづくりを進めています。

- 🚩フラッグ1 一人ひとりに役割と居場所のあるまち
- 🚩フラッグ2 助けがなかったら生きていけない人は全力で守る
- 🚩フラッグ3 ふるさと（生命のある空間）の風景を子どもたちに

5月のある日、このフラッグについて、市長から秘書広報課職員3人に「あなたが考えるそれぞれのフラッグの意味は何だと思えますか？新しいまちのかたちとは何だと思えますか？」と質問があり、それぞれが「自然を大切にし、子どもたちに残す」「行事やまちづくりに参加し、当事者になってもらうことが居場所づくりにつながる」「昔のようにおせっかいな人が増えて、困っている人をほっとけないまちになるといい」などと市長と意見を交わしました。その際の内容について掲載します。

このフラッグについて、「具体的ではない」、「よくわからない」と言われることがあります。しかし、私はいつも、具体的な形については話しておらず、そこへ行きつくまでの作り方の部分の話だけをしています。

上を目指して突き進む時代は終わり、結果をどうするかではなく、今度はそれぞれの人それぞれがそれぞれの目的地に到達するために目に見えない過程を大切にすべきだと思っています。その過程で「みんなでワイワイガヤガヤ話し合う」ことを大切にして欲しいと強く伝えたいです。

「ニンジンを作れ」「トマトを作れ」と言っているのではなく、「畑を作ろう」と言っているのです。先ほどあなた方職員3人が思い思いにフラッグについて考えを話されたように、人それぞれ考えが違います。そこに正解があるわけではなく、こうして意見を交換し合って、作り上げていくプロセスが大切だと考えています。そうしたプロセスも、国や市全体といった大きな単位ではなく、顔が見える範囲の小学校区単位で取り組んでいくべきだと思います。

今までの日本は人口が増え、みんな頂点の一点を目指してきました。スピードに追い付けない人は切り捨てても、急げ急げと上を目指して駆け上がってきた時代です。そこには常に目標があり、何をするにも、目標が数値化して存在していました。しかし、これからの50年は人口が減っていきます。頂点を目指す時代から、それぞれの人それぞれがそれぞれの麓を目指して歩き出す時代になりました。麓は360度に広がっていて、どこへでも、どんなルートを通っても行けます。これからは、正解のない、言い換えればなんでも新しいことをはじめやすい時代

になったということです。

長久手市のような小さなまちでも、校区によって置かれている状況や課題が様々に異なります。そして、それぞれの校区には、いろいろな経験を積んだ方々が大勢住んでおられます。そうした市民のみなさんの力を合わせて、麓に下りていく方法や方向を決めていってもらえればと思います。市役所は、もはや先導者ではなく、市民のみなさんのお手伝いをするスタッフです。市民のみなさんは知識・経験が豊富にあります。これからの時代の先行きを決めるには十分な能力をお持ちだと思えます。

幸福の4元素という言葉がありますが、

- ① 人に愛されること
- ② 人に褒められること
- ③ 人に必要とされること
- ④ 人の役に立つこと

誰もがこういった幸せを感じながら、みんなが一緒にまちづくりを進め、ひとりひとりに「役割がある」「たつせがある」居場所を作っていって欲しいと思えます。

現在、役所の事業で、おおむね65歳以上の方を対象とした事業で年に一度、温泉へのバスツアーを行っています。これは市が計画、実施し、10人以上の市職員が同行します。例えばですが、これを経験豊富な住民の方々に有償のような形で実施運営の主体をお願いしてはどうかと考えています。市役所の各課で、これまで行政だけで行ってきた事業を、1つでも住民のみなさんに主体となって実施してもらうようなことはできないだろうか。これをきっかけに住民のみなさんの居場所づくりへの第一歩が始まるのではないだろうかと考えています。

何度も言いますが、まちづくりに関しては、役所だけが決めるのではなく、住民のみなさんと一緒にワイワイガヤガヤとすることが大切です。「それではまったく議論が前に進まない」とおっしゃる方もみえますが、あえてそうした方法で取り組むことができるのが、今の長久手だと思えます。みんなでワイワイガヤガヤすること、これが新しいまちの形です。そこには、ぜひ女性を活用したいと思えます。男性は目標に向かって一直線ですが、女性は遠回りすることを恐れません。

これからの人口減少時代の新しい時代は、新しい価値感が生まれ、過去50年とはまったく違う形の社会になっていくはずで、困った人を助けるのに、待たなしの時代にもなりました。周辺の人が「おせっかい」を焼き、自然と助け合えるような仕組みづくりを、今後も進めていきたいと考えています。